

Center for the  
Multicultural  
Public  
Sphere

Working Paper 2023 No. 4-3

10月28日 16:00~17:30  
多文化公共圏実践演習(グローバル)  
多文化公共圏フォーラム 第8回

尾形祐美

「いつもそこにあるもの」について、  
作品作りにおいて



---

# ”いつもそこにあるもの”について

---

2022年10月28日 尾形祐美

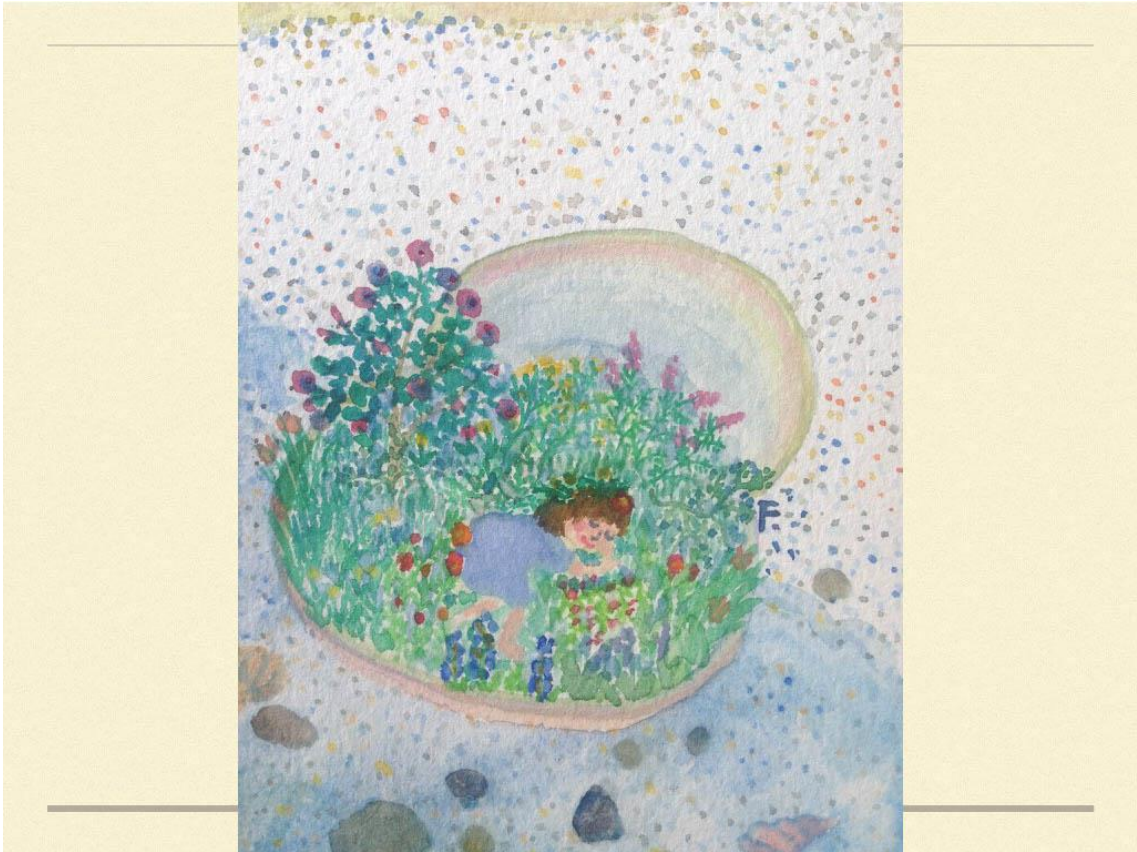
---

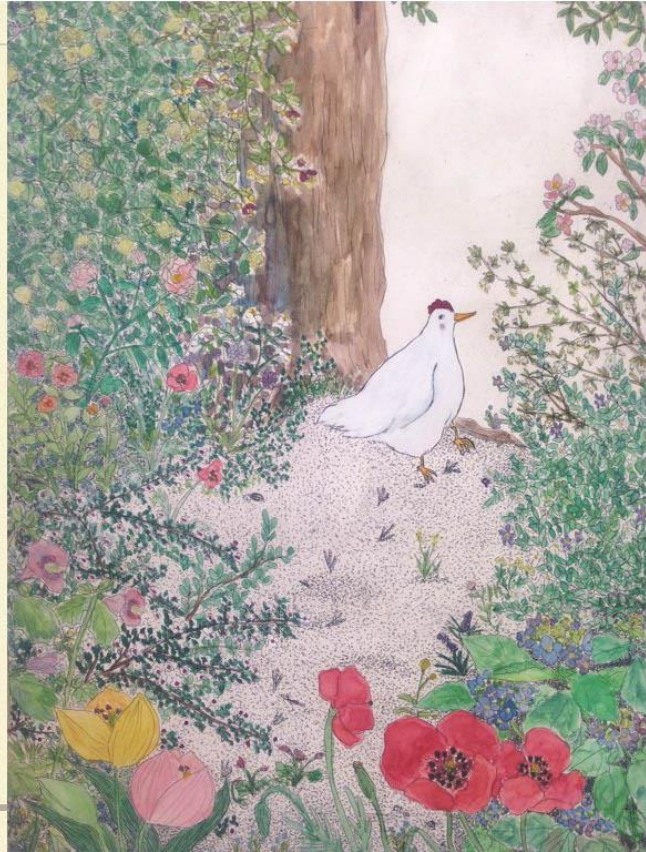
---

作品を作り始めたはじ  
めのころ

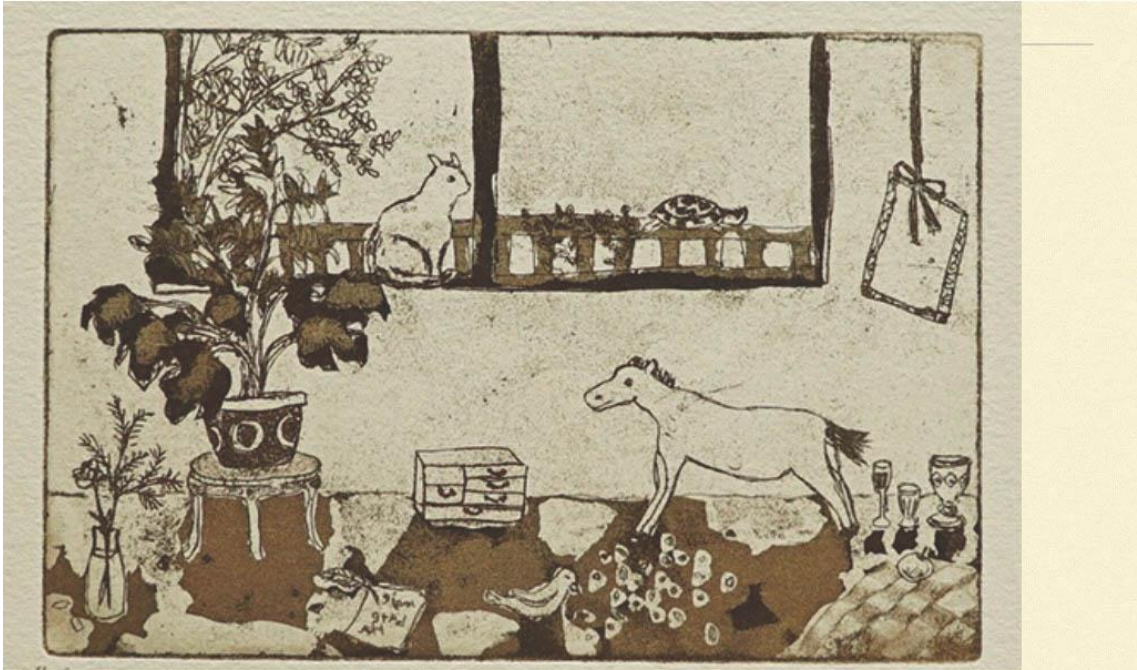
自分の頭の中に蓄積さ  
れてきたもの、イメージ  
を表現していると思っ  
ていた。





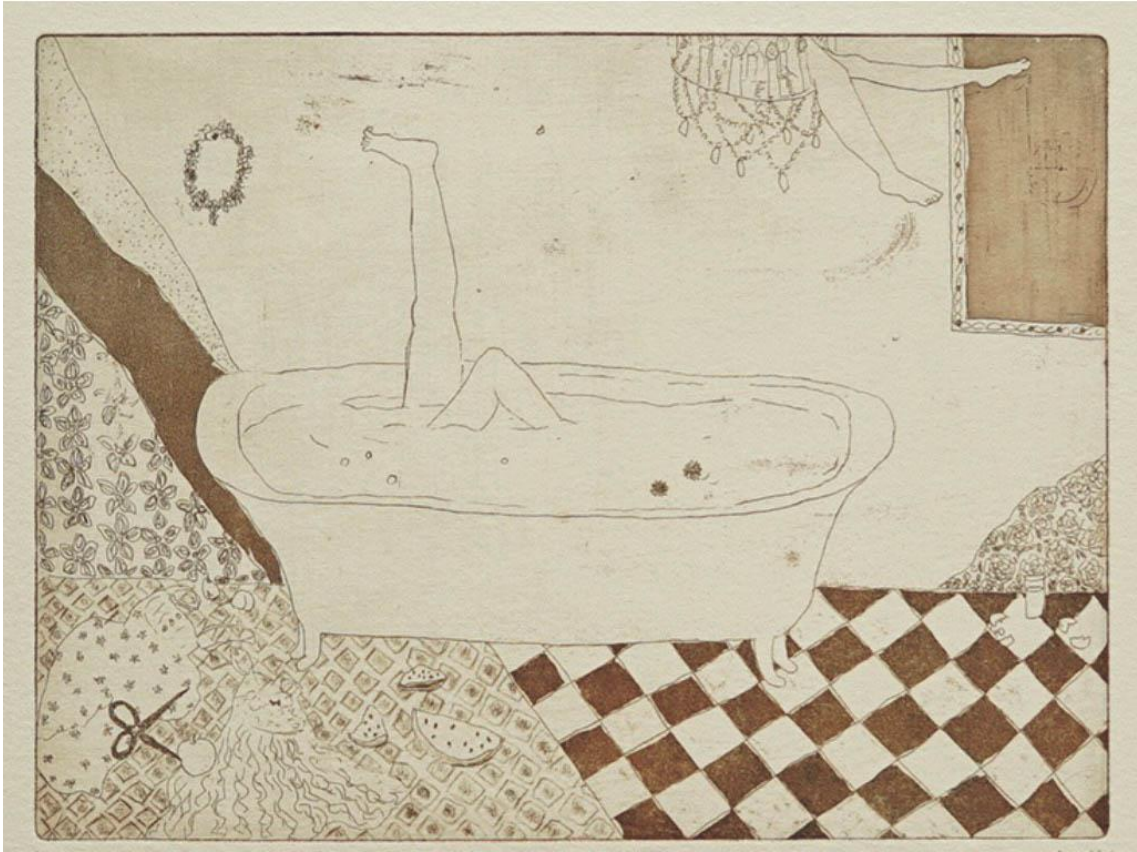


版画を始め、いつも身近で見てきた植物のモチーフ  
を無意識に使っていることに気づく。

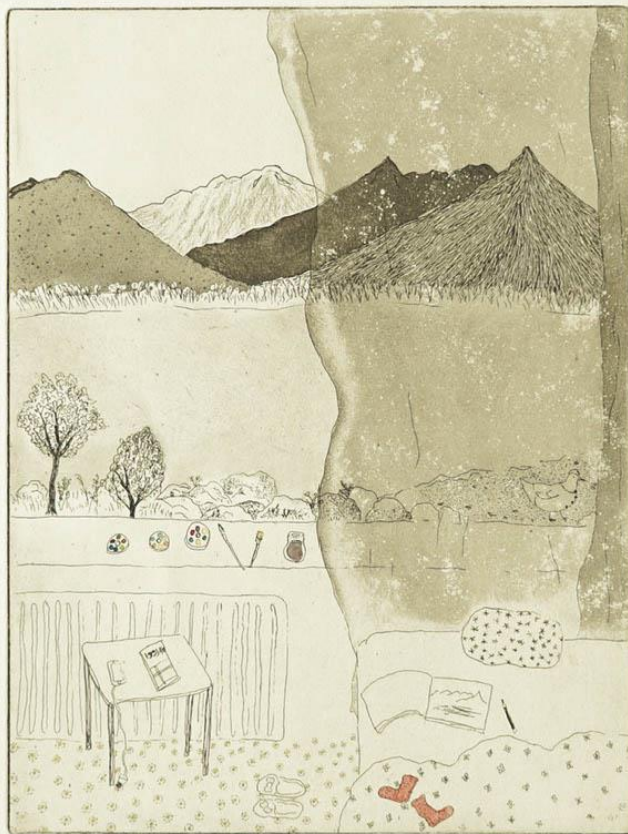


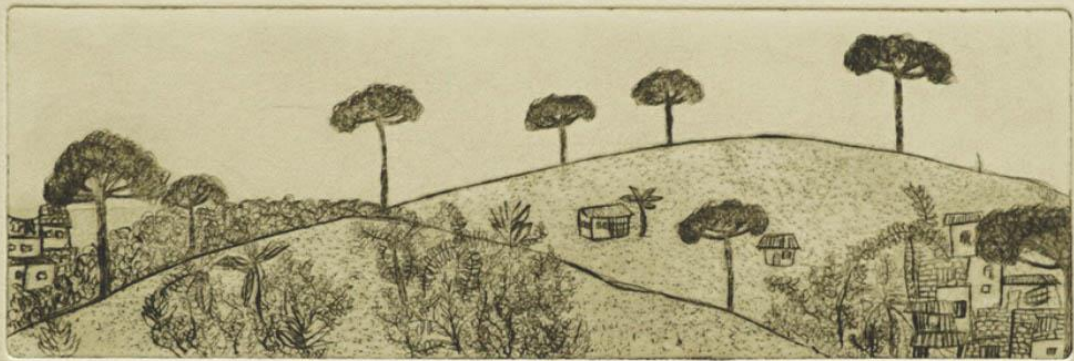
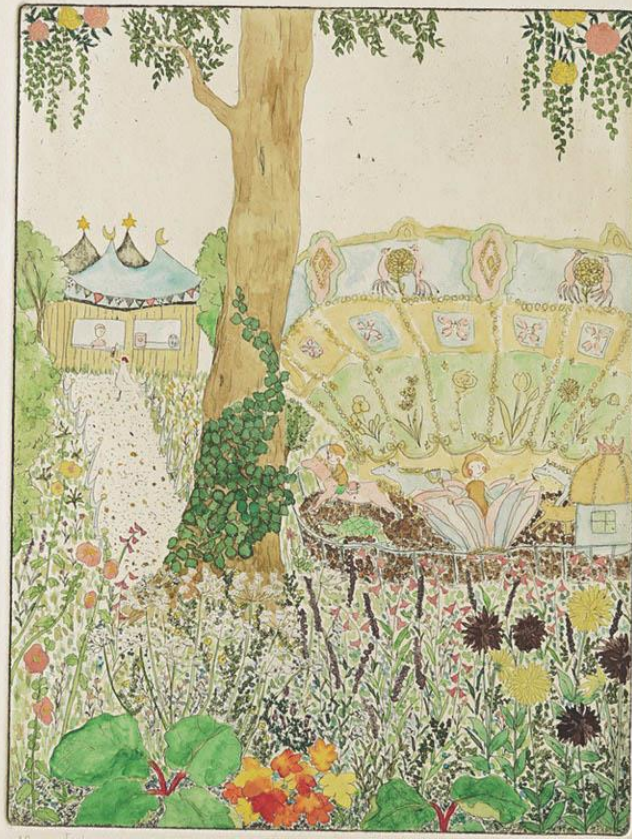
作品作りと平行に、チェコ映画の衣裳デザイナーであるエステル・クルンバホヴァーの修士論文を書いていたので、自然とエステルの映画の版画を作るように。



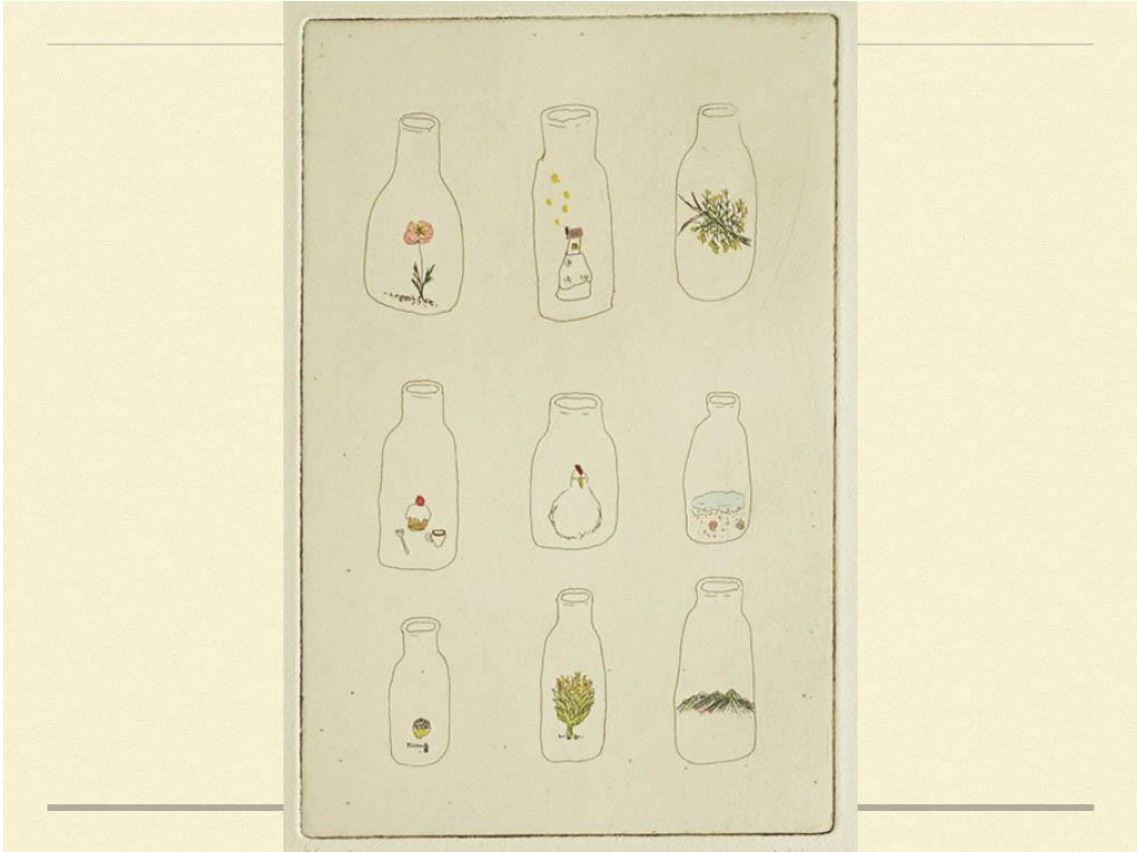


旅に出た時は旅で見たものを作品に。











南チェコに住み始めて数年、落ち着いた頃に、日本で私にとって『いつもそこにあったもの』がチェコの日常生活では視界の中になくことに気づく。

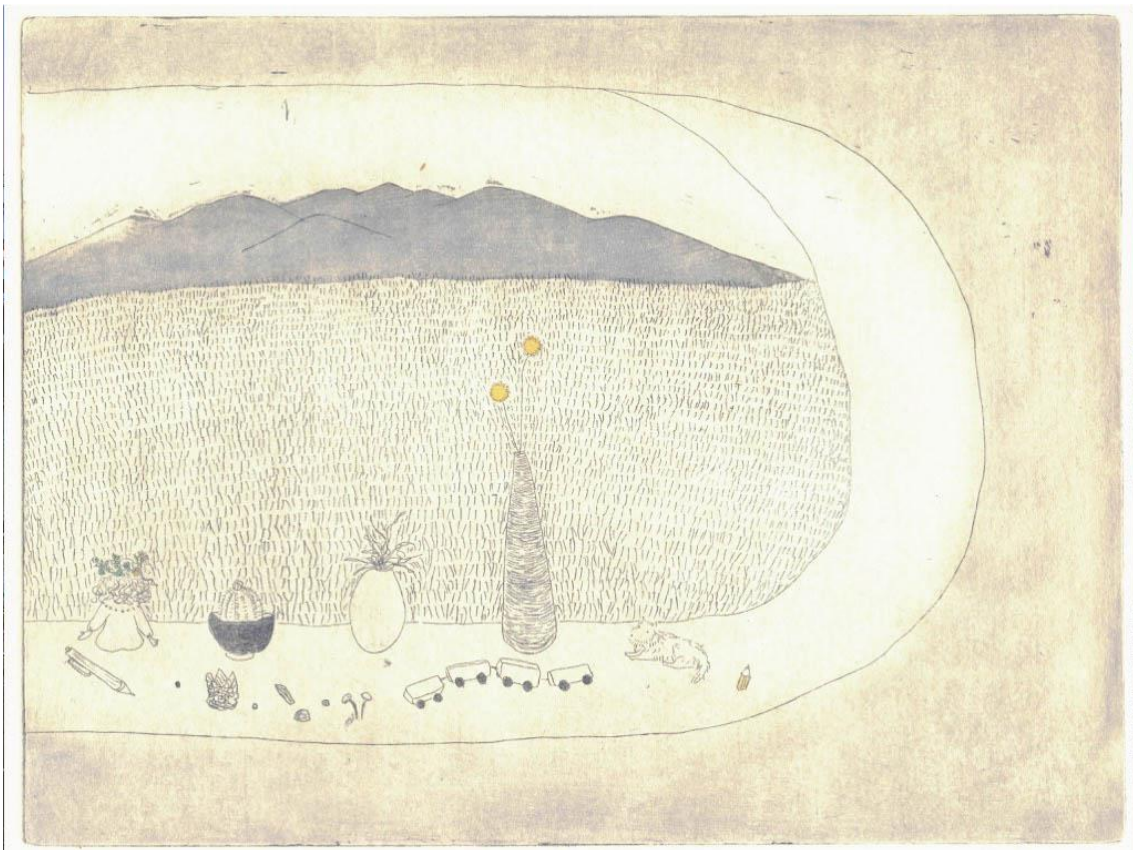
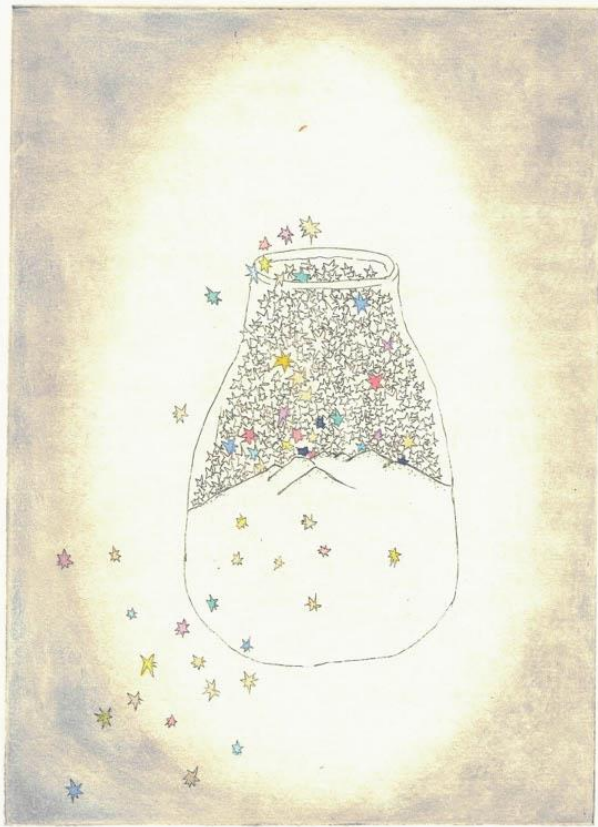
## 故郷の山によく似た雲の峰

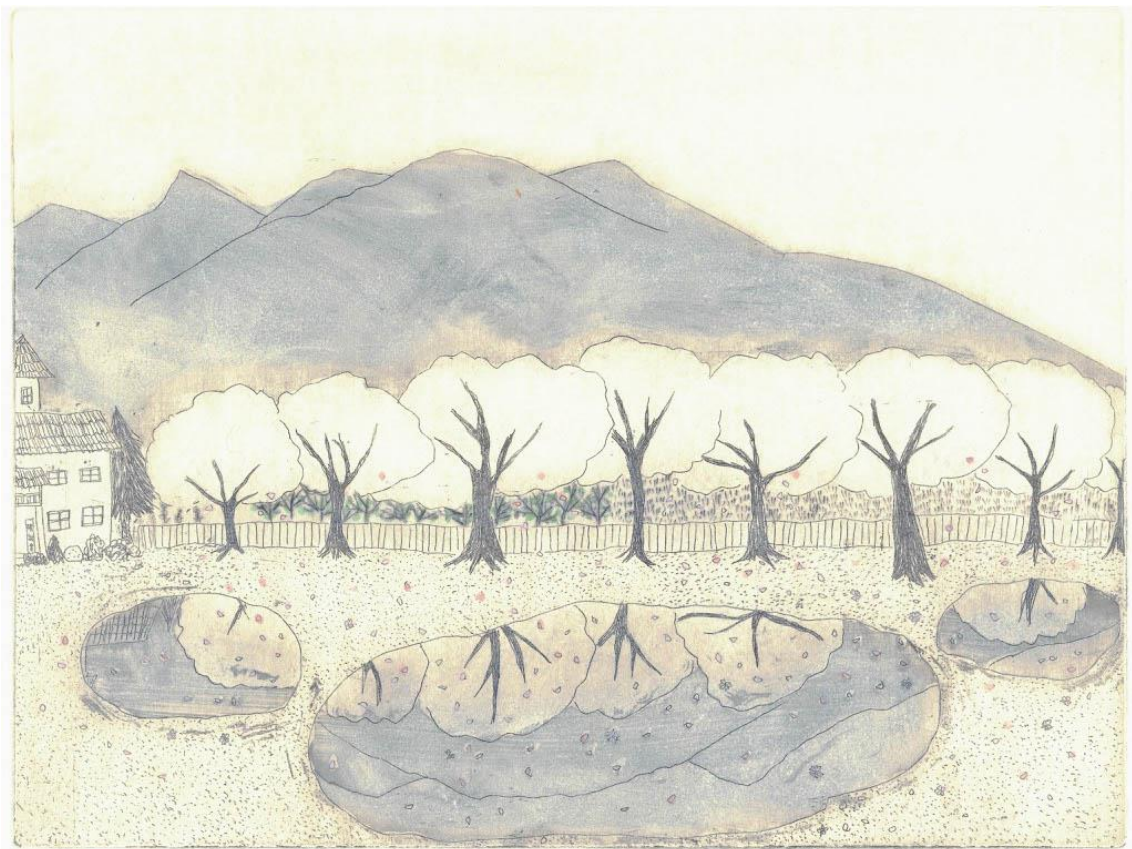
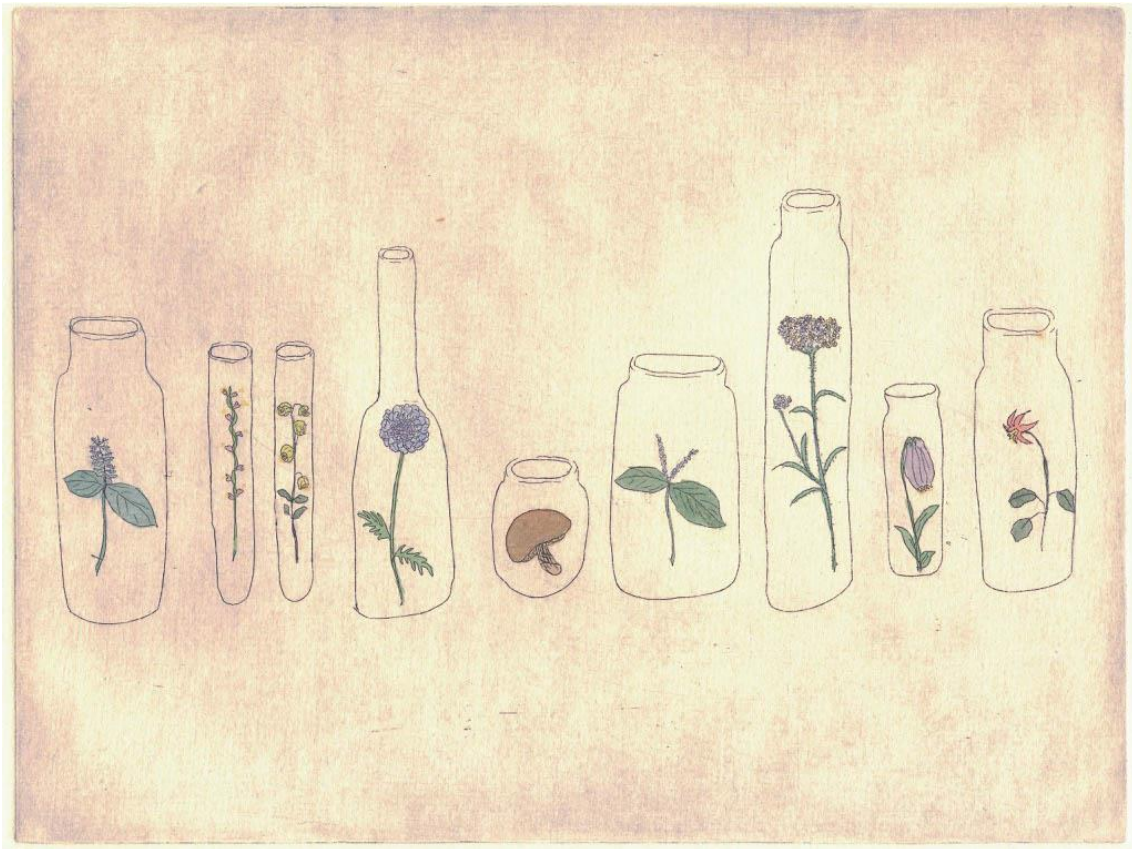
ふと空を見上げた時に、大きな山の峰が見えない、どこにいても見えないことに違和感を感じた。その頃雲の峰が見えると、山の影のように錯覚している自分に気づき、作った俳句。それをきっかけに、個人にとっての『いつもそこにあるもの』について考えるように。

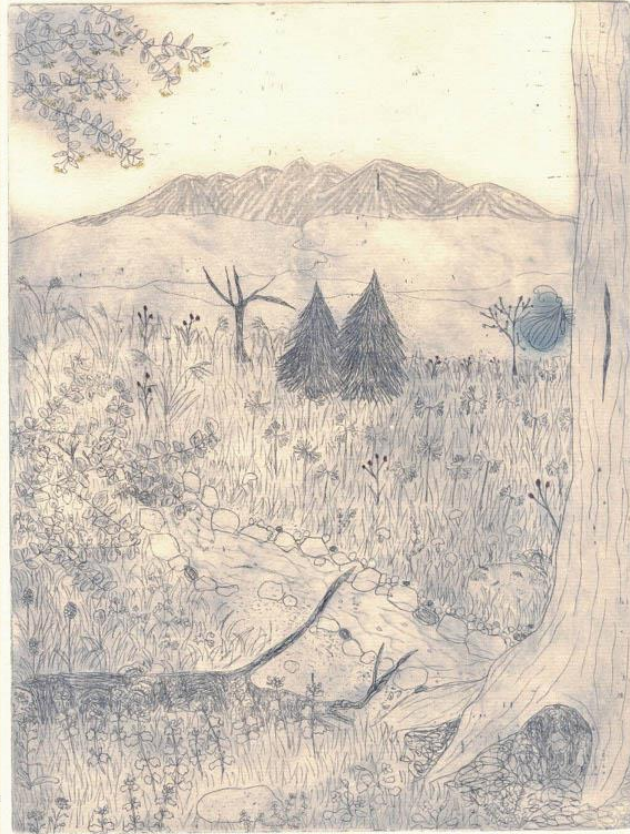
山梨で育ったわたしにとって  
『いつもそこにあるもの』の  
ひとつは、八ヶ岳の姿だった。

八ヶ岳だけでなく、日本全国  
には標高の高い山が多い。

比較的日本と気候の似ている  
中央ヨーロッパのチェコでも、  
日本のあちこちで見られる山  
並みは一般的な風景ではない  
ことに気づく。





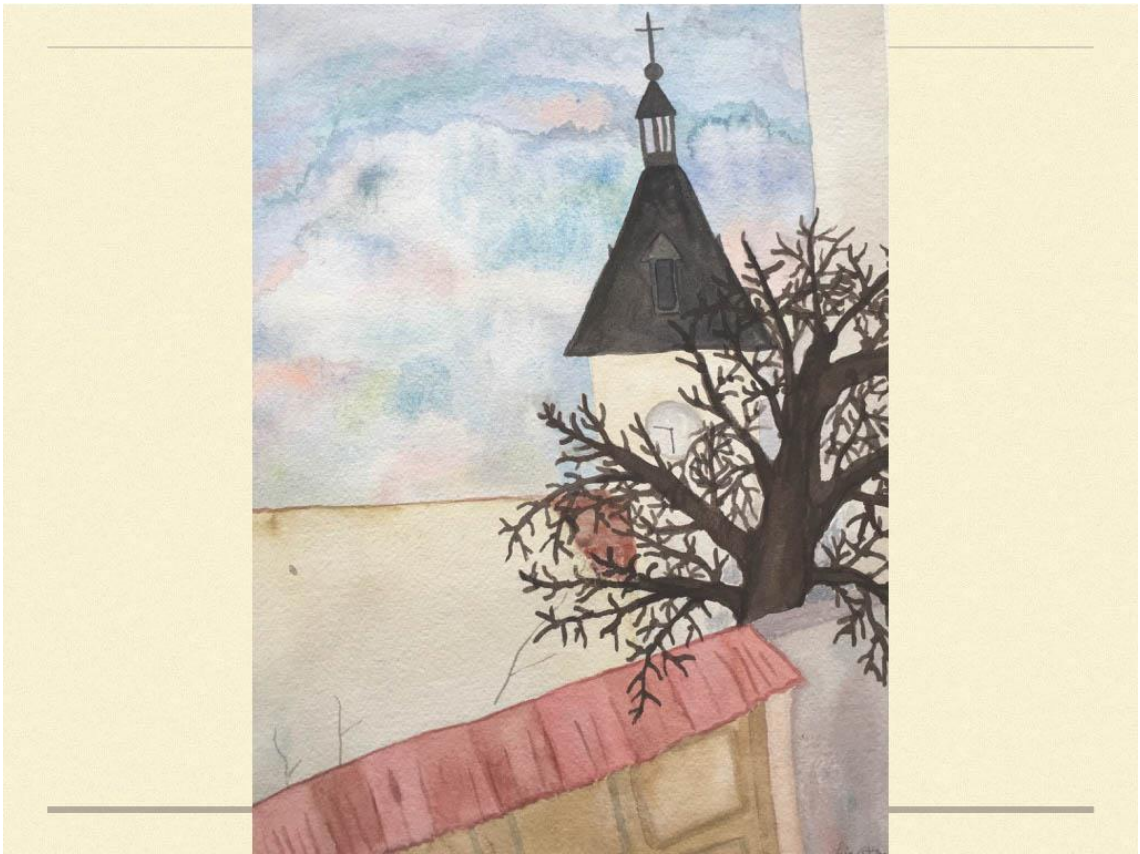


ヨーロッパの町や村にはたいてい教会の塔があり、時計が民家になかった頃、住民たちの生活リズムは教会の鐘の音で刻まれていた。町のどこにいても教会の塔が見えるように建てられている。

南チェコを拠点にしているうちに、この町に帰ってきた、と思う瞬間、そのときに見えたものは教会の塔で、わたしにとって『いつもそこにあるもの』がこの町にもできつつある、と感じ始める。山から教会の塔へ、その変化が面白く、絵を描きはじめた。















南チェコのホットスコ：  
Chodskoという地方の  
民俗衣裳を日常で着続  
けて一生を過ごした大  
叔母さん。  
夫の家族のルーツや、  
チェコの民俗文化に関  
心を持ち始める。







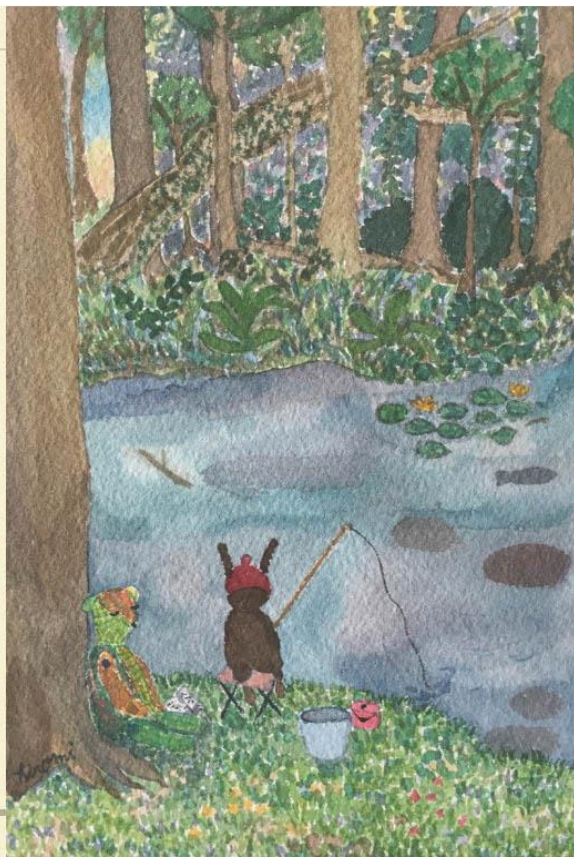
チェコの民俗衣裳や刺繍の模様を見て、いつも身近にあった日本の伝統的な模様を再発見するきっかけに。  
新しい形式の作品作りのインスピレーションとなる。

詳細は11月11日のオンデマンド授業で紹介します。

ヴオドニャニは「水の町」という意味で、他の地方に比べると水辺が多い町。

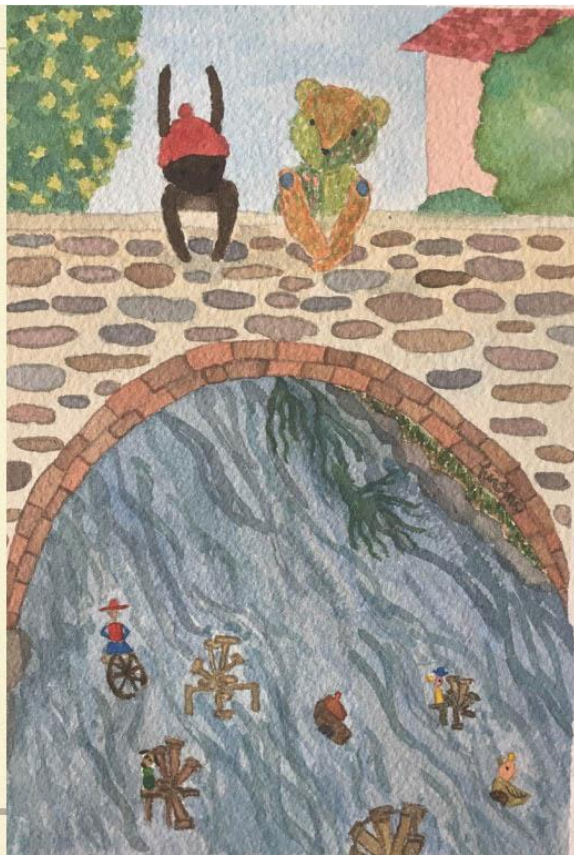
塔の次は「水のある景色」が気になっている。

水のあり方も、地形の違いから、日本と微妙に違う。



個人が「いつもそこにあるもの」として日常の中で当たり前になっているもの、ことの裏側に、自分の国の文化背景、または自身が住んでいる場所の文化背景が色濃く見つけられる。

「日本的なもの」も、歌舞伎、花道、茶道...などの伝統文化の中だけでなく、ひとりひとりの日常の中にも実はヒントがあるのでは。





オンライン国際交流 2022/チェコ共和国

松井貴子「多文化公共圏実践演習（グローバル）」

多文化公共圏フォーラム第8回

尾形祐美「南チェコでことばについて考える」講義資料

「いつもそこにあるもの」について、作品作りにおいて

編集 松井貴子/宇都宮大学国際学部日本文化論研究室

発行 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

2023年11月30日発行